

Analecta Indica

松村 恒

L. 術婆伽説話補足

高位の者に身分違いの思いを寄せ胸を焦がす説話は取りたてて奇異な主題ではないが、『大智度論』に淵源を持つこの物語は我が国でも変容を伴いながらも綿々と伝承されてきた。渡部論文のサポートの意味で『大智度論』所収話の訳文についての覚え書きを *Analecta Serica I*『大妻比較文化』12 (2011), 94-96 に記しておいたが、ひとつ論文を見落としていたので、ここに補足しておきたい。

島内景二「術婆伽説話にみる受容と創造」『汲古』11 (1987.6), 26-34.

島内氏は「胸こがるる」という表現の背後にこの説話があることを見抜き、この表現に関連して術婆伽説話を引用する古注釈書を列挙し、そこから室町物語のいくつかへと流れ込む道筋を示した。その過程において、西村論文の主題でもあった西行物語へも進むプロセスも示され、極めて有益である。また歌学書は出典注記ばかりでなく、同時に創造（再話・改作）の役割も合わせ担っていた。

ところで『大智度論』は本来の般若経関連の教理事項のみならず、仏教説話関連でも大量の情報提供もとであった。しかし中世の文学注釈者達が同書を使いこなしていたとは思われない。術婆伽説話の場合、直接の出典情報源は『三教指帰』或いはその注釈である。同書には多数の注釈が伝えられているが、説話に関するものはほぼ同一の注記が見られるので、注釈者達は *Erzählstoff* を共有していたと思われる。それがどういうものであったかは定かではないが、『三教指帰』諸注の説話事項を当たってゆけば、ある程度までは再構できるであろう。なお『大智度論』の現代語訳が『禅研究所紀要』15 (1987) より連載中である。該当箇所については確認していない。

【その他の補足】 ad 『Circles』5 (2002), p.20 n.10; 『心のまんだら』4 (東京：寿徳寺, 2004), p.1226 二：その後ドラえもんアイテムのレファレンスツールが出た。『ドラえもん最新ひみつ道具大事典』(東京：小学館, 2008), 376.

ad 『へるん』48 (2011), 36-39：後藤丹治「『夢應の鯉魚』の原據」『國語國文』21-9 [218](1952.10)[吉澤博士喜壽記念特輯], 72(644)-82(654); 西田勝「『雨月物語』の世界ーその三『夢應の鯉魚』」『東海近世』1 (1988.3), 36-45.

ad 『宝物集探求』1 (2010), 31-38 cum82:待望久しい金藏論のエディションが出た。「堅誓獅子説話」の平行話も収録されている。宮井里佳・本井牧子『金藏論 本文と研究』(京都：臨川, 2011), 504-506. 標題の下に「出賢愚経略要」とある。

LI. 梵文願成就文の訳文について

本年春に明治20年刊の加藤正廓『願成就文梵漢対弁』を見出し^{*1}、近代日本における最初のサンスクリットの手引書ではないかと思ひ、同書の複製と現代語訳を初夏に公刊した。

『願成就文梵漢対辯』(=プリンス通信・Beiheft 108) (= Bibliotheca Scriptorum Classicorum Omegiana VI)
Tama: Omega Verlag, 2011.

『第十八願成就文梵漢対照解説』(=プリンス通信・Beiheft 109) Tama: Omega Verlag, 2011.

複製刊行の時点では同書の意義ばかりか著者について愚かにも何ら知るところはなく誤解をしていたが、単なる無量寿経の一節のサンスクリット文の逐語的解説に留まらず、魏訳の相当箇所、真宗教学との折り合いをつけるものであったことを徐々に知るを得、また諸先生からのご教示を忝なくし、その成果は現代語訳の訳者序の中にある程度記しておいた。ところで扱われた部分のサンスクリット文は次の様なものである。

ye kecit sattvāḥ tasya bhagavato 'mitābhāsyā nāmadheyam śṛṇvanti śrutvā cāntaśa ekacittotpādam
apy adhyāśayena prasādasahagatena cittam utpādayanti te sarve 'vaivartikatāyām santy anuttarāyāḥ
samyaksambodheḥ

現代語訳の作業が殆ど終了しかけた段階で、既存の和訳の該当箇所を参照したが、問題点が現れた。大慌てで【補遺】として末尾に若干を記しておいてが、いかにも舌足らずであった。ここにもう少しわかりやすい形で補っておきたい。

その時参照した和訳文とは次のものである。(下線は筆者)

およそいかなる有情にもせよ、かのアミターバ如来の名を聞き、聞きおわって、たとえ一度でも、深い
ころざしによって、浄らかな信をともなった心を起こすならば、彼らすべては、この上ない完全な正
覚より後退しない境地にとどまるのである。

(山口-桜部訳 = 『浄土三部経』 [= 大乘仏典 6] [東京: 中央公論社, 1976; 新訂版 1981; 文庫本 2002], 60-
61 = 644)

上の訳文中の下線を施した部分に眼が惹かれた。上に引いたサンスクリット文で対応を探すとすれば、極く普通に考えれば *prasādasahagatena cittam* であり、<具格+対格>の組み合わせであるから、下線部の様にはなり得ない。訳者二名は真宗の著名な学者であり、単

*1 同書を見出した折には、再発見ではないかと思うほど単純に浮かれていた。しかしその後、例えば畝部俊英『『阿弥陀経』読解』(上)『同朋大學論叢』37(1977.12), p.13 n.17に引かれていることなどに気が付いた。同書の再刊、並びに辞典類などでの同書の評価については、現代語訳に付した序文に記してある。また原著者加藤正廓の議論は、畝部氏の称名思想に関する一連の研究並びに藤田宏達『浄土三部経の研究』(東京: 岩波, 2007), 443-457により近代的なスタイルで見ることができる。また十念と一念についての岡亮二「無量寿経における「十念」と「一念」」『真宗研究』12(1967), 50-60; 聞名についての田中無量「無量寿経の聞名思想——『大品般若経』の「名字・不住」思想との関係考——」『龍谷大学大学院文学研究科紀要』31(2009), 30-45等と研究は枚挙に暇がない。将来的に記述文献目録がまとめられることが望まれる。

なる誤訳とは考えられ得ないので、その他の訳書を遅ればせながら参照したという泥縄的
手順になった。その結論は既に上記【補遺】に記してあるので、ここではそこに到る経過は
一切省略する。要は翻訳の基とした底本が異なっていたから、というあまりにもあたりま
えのことであった。先に引いたサンスクリット文は当然のことながら、明治20年当時には
唯一の印刷刊本であったミュラー＝南條本からのものであるが（分段の関係上完全な転写
ではない）、山口-桜部訳が基づいたのはそれではなく、足利本である。足利本の該当箇所
はミュラー＝南條本とは同一ではない。

ye kecit sattvās tasya 'mitābhāsyā tathāgatasya nāmadheyam śṛṅvanti, śrutvā cāntaśa ekacittotpādam apy
adhyāśayena prasādasahagatam utpādayanti, sarve te 'vaivarttikatāyām samītiṣṭhante 'nuttarāyāḥ
samyaksambodheḥ.

（『足利惇氏著作集』2〔東京：東海大学出版会，1988〕，157.13-16）^{*1}

かくして山口-桜部訳は決して誤訳ではなく、この文を訳したものであることがわかる。
しかし前回は敢えて不問に付したのだが、ことはここで終わるのではない。一見すると下
線部のみならず全般は大体対応しているようであるが、それは大体という程度に於いて
である。prasādasahagatam utpādayanti の部分は＜対格＋定動詞＞であるから、対格部分が
動詞の目的語になっているので「～を・・・する」という訳文になるのは当然であるが、
°sahagata- というのは「～を伴ってある」という形容語句であるから、それが掛かる名詞を
想定しなくてはならない。そこで山口-桜部訳は足利本本文にはない「心を」を補って訳し
ているのである。或いは補ったのではなく、3つ前の複合語中に使われている citta を被修
飾語としたのかもしれない。その場合は utpādam を utpādayanti の目的語と見なすことにな
り、figura etymologica 構文ということになる。かなりぎこちない解釈ということになるが、
和訳文の「一度でも」という表現は明らかに eka-citta- という複合語を一体として捉えては
おらず、eka と citta に分断したことを示している。従って山口-桜部訳は誤訳ではないが、
かなり変わった訳であるということになる。また私見を述べれば ekacitta 「一心」という概
念は重要なものであるから、こうして分断するような見解に与することはできない。

さてもっと大きな問題を指摘しておかねばならない。足利本本文はこの箇所に限って
のことだが、訳しにくい。足利は当時良質と思われた写本 R を主軸に新刊本を提供した。
その判断は基本的には正しいと思う。ただしこの箇所に関して K. Fujita, *The Larger
Sukhāvātīvyūha: Romanized Text of the Sanskrit Manuscripts from Nepal*, pt.II (Tokyo: The
Sankibo Press, 1993), 928-929 を参照すると、33 写本のうち R の読みはただ一つという孤
立したものである。確かに R 写本は良質なもののなのであろうが、この箇所に限っては写誤

*1 著作集版は法蔵館版、1965 と見かけはよく似ているが、組み直したもので、頁付はもとより、改頁・改行
は微妙に異なっている。また新たな誤植も付加されているので (e.g. 157.13)、写真複製にならなかったこ
とが惜まれる。

であり、*adhyāśayena prasādasahagat<ena citt>am utpādayanti* と修正されるべきものであり、またそれは多数の写本によって支持される。こうすると先ほどの形容語句は具格となり、直前の具格名詞 *adhyāśayena* とまとめて把握して、「清らかな信を伴った深い考えで以て、心を起こす」となる。このように本文の安定していない仏典のサンスクリット本を訳すといういとなみは、たとえ正確であっても、(本文が校訂済みの) 古典の読本などを訳して事足りりというようなわけにはいかない。絶えず文献学的操作が関わってくるということは念頭に置いておくべきであろう。山口-桜部訳は誤訳ではないにしても、翻訳している原文に対する認識の甘さはあった。

こうなってくるとサンスクリット本の翻訳者は、単に語学力だけで訳してゆけばよいということにはならず、絶えず訳者自身が本文校訂者であることが求められてくる。理屈ではそれはそうなのであるが、これは実際的ではない。そこで次善の策として、極めて不安定にして浮動的なサンスクリット刊本に替えて、チベット語訳から和訳を作成する方式がある。これはテキストの伝承史の上でのある一段階を反映するものに過ぎないが、それはそれなりに安定しており、その一段階を理解することは極めて有益である。それだからこそ無量寿経の場合は、早い時期にナルタン版からの筆写本が公刊され、研究者に多大の便宜をもたらしてきたのである。近年各種の西蔵大蔵経についての知識が増大し、多種の刊本・写本を参照して異読を書き留めたものが現れた。

「浄土教の総合的研究」研究班『藏訳無量寿経異本校合表(稿本)』京都：佛教大学総合研究所, 1999.¹
対応する箇所は、146.9-147.3 に見られる。

sems can gang dag kha cig gis bcom ldan 'das 'od dpag med de'i mtshan thos la / thos nas kyang tha na sems
bskyed pa gcig tsam zhig bsam pa thag pa nas dang ba dang ldan pas skyed pa de dag thams cad bla na med pa
yang dag par rdzogs pa'i byang chub las phyir mi ldog pa'i phyir ro //

この資料は本文部にトク写本が与えられ、脚注に異読が示される。上の本文の *dang ba dang ldan pas skyed* に対し、*Q dad pa dang dga' ba skyed*, *D da dad dang dga' ba bskyed*, *N dang ba dang ldan pas bskyed*, *HU dad pa dang dga' ba bskyed* とあり、トク写本がかなり特殊な位置を占めることが示唆される。この部分はサンスクリット文の *prasādasahagatena* に相当する部分であるが、*dang ba* も *dad pa* も *dga' ba* も *prasāda* に対応し得る。*dang ldan pa* が *sahagata* に当たる。異読が種々あるということは、この部分が一義的に理解されていなかったことの証左である。ところで *bsam pa thag pa nas* が *adhyāśayena* に当たることは問題ないが、この一句で独立した副詞句になっていることは注目される。すると残りの副詞句はいずれの読みを採るにせよ、これとはまた別の副詞句ということになる。先のサンスクリット文に於いて筆者は二つの具格語は一方がもう一方に掛かるものと考えて、二つ合わせ

*1 本表に使用されなかった資料の報告もある。小野田俊藏「藏訳無量寿経ウランバートル写本」『印度學佛教學研究』52-1 [103](2003.12), 1-7.

一つの副詞句と考えたが、チベットの訳者はそうは考えなかった。またチベット文には cittam の相当語がない。青木文教は恐らくはナルタン版から訳したのではないかと思われるが、『西藏原本大無量壽經國譯』（京都：光壽會，1928），62 にて「誠実の思いより、至純を具して、起せしものは」と、極めて直訳的に訳している。

また先の【補遺】にて新しい英語訳の書題だけを挙げて中身には何も触れなかった。

Luis O. Gómez, *Land of Bliss: The Paradise of the Buddha of Measureless Light, Sanskrit and Chinese Versions of the Sukhāvāṭīvyūha Sūtras*[sic] (= Studies in the Buddhist Traditions). Honolulu: University of Hawai'i, 1996.

本訳には独自の分段が施してあり、また随所に小見出しが付加されている。当該箇所は 92 頁に見られる。

Assurances of Awakening

§90. "Why is this so? Because those living beings who hear the name of the Tathagata Amitabha, and when they hear it they resolutely conceive of one thought of serene trust, even if it is only this single thought, will surely not fall back in their progress toward unsurpassable, perfect, full awakening.

本英訳書は概して文献学的に弱い印象を与える。大小両経の梵漢の英訳を主軸とした構成であるが、そもそも使用底本については全く触れず、翻訳の方針手順についても曖昧である^{*1}。nāmadheya / 名号の英訳をただ "name" とするなど杜撰である。nāma の訳と区別するような工夫をしようとした形跡が見られない。魏訳対応箇所の英訳では流石にそれだけで済ますわけにもゆかなかつたらしく "his name and vow" としているが (p.187)、誤訳と言ってよい^{*2}。resolutely は adhyāśayena を訳したものだとする、serene trust は prasāda であるから (cf. also p.324)、conceive of one thought of が何だかわからなくなってしまう。even if it is only this single thought は antaśa ekacittotpādam apy を訳したものであろう。この段落には注が付いていて (p.237 n.62)、そこで "This paragraph also contains the two crucial terms "resolutely" and "accompanied by serene trust" " と述べているので、上のチベット語訳に言及した箇所で見摘した様に、チベット語訳ではふたつの修飾句を別々の副詞句として扱っているが、この英訳もそれと同類ということになる。しかしサンスクリット原文はいずれに依るものかは明らかにされていないので、ふたつの修飾句の格形^{*3}並びに訳者がそれをどのように考えたのかは我々にはわからない。また英語には one thought of, this single thought と似た句が再出するが、山口-桜部訳のような分断の考えがあったことも考えられないで

*1 前言の p.xiii 以下に free translation, technical translation について述べている段落があるが、よくわからない。少なくともいずれも accurate translation というのではなさそうである。

*2 nāmadheya と nāma の区別については、畝部俊英「梵文『無量壽經』における諸仏と衆生の呼応」(中)『同朋仏教』67 (1974.7), p.60 n.3 を参照。

*3 万が一足利本が底本であったとすれば、前述の通りこの箇所の本文は R 写本の写誤を継承したものであるから、それに基づいて two crucial terms と言っても説得性に乏しい。また英訳者はチベット語訳については一切沈黙している。チベット語の素養を欠くインド仏教の研究者ということになる。

はない（英訳者はチベット語を解する能力を欠くので、チベット語訳を参照してこの措置をなした、ということはある得ない）。

ところで上の英文自体が通常の構文を取っているのかも疑問である。私は文法重視・訳読偏重の旧式の英語教育で育ち、近年もてはやされるコミュニカティヴ・イングリッシュを体得してはいないのでその判定は怪しいが、文中の等位接続詞andが何と何とを結んでいるかは不分明である。少なくとも佐々木高政『英文構成法』（東京：金子書房，1949;5th rev.ed. 1987）で教えられる英文とは違うようだ*4。兎に角絶対分詞を含むサンスクリット原文の構成を正しく写し出したという段階からは程遠いものである。

II. トルストイ「カルマ」とケイラス「カルマ」

トルストイの「カルマ」(1894)は翻訳である。ポール・ケイラスが自身が主宰する雑誌 *The Open Court* No. 368 (Vol. VIII-37) (Sep. 13, 1894), 4217b-4221b に P. C. のイニシャルで発表した "Karma: A Tale with a Moral" をその発刊直後に露訳したものである。我が国ではこの作品が言及される契機は乏しかったのであるが、芥川龍之介「蜘蛛の糸」に呼応する寓話を含んでいるために、芥川研究者の話題にのぼることがあった。しかしトルストイの露文と原文が対照されて扱われたことはなかった（露文を読まない小林のトルストイ批判は不適である。Cf. Beiheft 112, p.8）。翻訳作品であるので、正しい評価のためには原文と照らし合わせての検討は必須である。本来であれば、「カルマ」全体にわたって対照作業を遂行すべきであるが、今は「蜘蛛の糸」関連部分のみを扱い（すなわち2版以降で第5章と章立てされている箇所）、資料提供とする。なおケイラス「カルマ」はその後版を重ねるが、そのたびごとに本文は変更されているので、露訳との対照にあたっては、雑誌掲載の初版に依らねばならない。丸囲み数字は露英の対照を分かり易くするために筆者の付したものである。（使用したエディションについては、文献目録と共にプリンス通信・Beiheft 111に記載されている）

① Агаман сказал: ② - Я делал много зла и не делал добра. ③ Как могу я выпутаться из той сети горя, которую я связал из злых желаний моего сердца? ④ Моя карма повлечет меня в ад, я никогда не буду в состоянии вступить на путь спасения.	① The robber chief said. ② "I have done much evil and no good. ③ How can I extricate myself from the net of sorrow which I have woven out of the evil desires of my own heart? ④ My Karma will lead me to hell and I shall never be able to walk on the path of salvation."
---	---

*4 英訳者自身が標準的な英語を用いない意図は明記されている。"an English rendering that comes as close as possible to the North American vernacular" (p.xiv) そもそもこの段の小見出しにも *Awakening* が使われているが、「悟り」が理解されてしまう。そこからは「往生」はイメージし難い。

① 英「盗賊の首領」に対し、露は「首領」だけの簡略化。

③ net = сеть という語の使用は後ででてくる蜘蛛の網の伏線となっているのかどうかは、一考に値する。英で関係代名詞 which が sorrow と net のどちらを先行詞とするのかはそれだけではわからない。関係節の定動詞 have woven が net の縁語であるので、そこで初めて net が先行詞であると決定できる。一方露では、которую は女性単数対格なので、先行詞は中性の горя でなく女性の сети であると形態の上から決定される。

④ 英「救済の道を歩む」に対し、露「救済の道に参入する」

⑤ И монах сказал: ⑥ - Да, ваша карма пожнет в будущих воплощениях плоды тех семян, которые вы посеяли. ⑦ Для делателя дурных дел нет избавления от последствий своих дурных поступков.	⑤ Said the shramana: ⑥ "Indeed your Karma will in its future incarnations reap the seed of evil that you have sown. ⑦ There is no escape for an evil doer from the consequences of his own actions.
---	---

⑤ 英は仏僧に対してサンスクリットの śramaṇa を用いている。これは「沙門」の原語であり、元来は通インド的に出家し、修行精進する修行者を意味していた。仏教もこの語を取り入れ、出家僧に対して用いている。露の монах はキリスト教の修道者のニュアンスがあるが、沙門の訳語として採択されている。

⑥ 英 Indeed に対して、露は Да を充てている。英の「あなたが播いた悪の種を刈り取る」に対して露は多少引き延ばして「あなたが播いたそれらの種の[属格複数]結果を刈り取る」としている。この表現の背後には次の共通ヨーロッパ諺がある：As you sow, so (will) you reap = Что посеешь, то (и) пожнешь (共通ヨーロッパ諺については、『パツォライ諺学入門』 [= プリンス通信・Baiheft 101] [= Materialia Parœmiologica XXXII][Tama: Omega Verlag, 2010] を参照)。

⑦ 英「逃れること」が露で否定生格の「救い」となっている以外は、露英正確に対応している。

⑧ Но не отчаивайтесь: ⑨ всякий человек может спастись, но только с тем условием, чтобы он искоренил из себя заблуждение личности.	⑧ But there is no cause for despair. ⑨ The man who is converted and has rooted out the illusion of self with all its lusts and sinful desires will be a source of blessing to himself and others.
---	---

⑧ 英「絶望するいわれはない」に対し、露は「あなたは絶望してはなりません」と命令文に書き換えている。

⑨ この文の露訳は英文の内容を大体は伝えてはいるが、組み立て方には相当に変更を加えている。この文は以下に引かれる寓話の教訓を先取りしてまとめた文であるので、極

めて重要である。特にthe illusion of self = заблуждение личности というのがキーワードとなっている。ケイラスは自らパーリ語やサンスクリットをどんどん読んでゆくタイプの学者ではなかったが、彼の主著『仏陀の福音』の出典表と参考文献リストを見ると、当時でいた主要一次資料の欧語訳、また19世紀の西欧の仏教研究のエッセンスは体得していたと思われる。当時のヨーロッパではパーリ語聖典に反映される原始仏教の教義を仏教の始原形とみる傾向が強かった。確かにそこに仏教の根本は説かれている。インド以来中央アジア・中国を経て日本に伝来し、その後の発展形を含めると（東南アジアに広まった別の系統のものもある）、仏教にはさまざまな枝葉があって一括して捉えることが困難であるが、仏教が仏教であるための根幹はある。それは<縁起>という徹底した相対化の教えである。ヨーロッパでの近代合理主義の祖デカルトは外界のあらゆる事象を懐疑を以て観察した。そして観察の出発点たる自己に基準を置いた。ブッダはその自己をも相対化しているのである。デカルトより一步先に、いや百万歩くらい先に進んでいたのである。つまり上のキーワードは、他のものとは違った特別な自分自身があるという誤った考え、と理解されるべきものである。ケイラスはその意味でこの句を使用し、トルストイもほぼそのように理解した。そしてトルストイもこの文が重要であることを認識したからこそ、単に逐語的に置き換えるだけでは満足せず、自分の表現で書き直したのではあるまいか。それでは露英の違いを見てゆこう。英「改心して、すべての自我意識の官能的欲求と罪深い欲望と共に自我へのとらわれという誤った考えを根絶してしまった者は、その者自身と（その周りの）他の人々が恩恵を頂くもととなるであろう」：露「どんな人でも次の条件の許に救われ得る（可能 может）。（すなわちその条件とは）その人が自分から自我意識という誤った考えを根絶する（というものである）」чтобыで導かれる節内の過去形は過去の意味ではなく、接続法である。この文では自分が誤った意識を根絶するというので、その恩恵が他の人々にも及ぶというのに違和感を覚えたのか、トルストイは他の人々というのを削ってしまった。しかしトルストイはこの寓話のみならず、作品「カルマ」全体が個別ではなく一般ということを説いていることは熟知しているので、ここはちょっとしたミスである。このあたりは廻向の問題その他を勉強しないと、中々分かり難いのではあるが。

<p>⑩ Как пример этого, я расскажу вам историю великого разбойника Кандаты, который умер нераскаянным и вновь родился дьяволом в аду, где он мучился за свои дурные дела самыми ужасными страданиями.</p>	<p>⑩ As an illustration, I will tell you the story of the great robber Kandata who died without repentance and was reborn as a demon in hell where he suffered for his evil deeds the most terrible agonies and pains.</p>
--	--

⑩ As an illustration は Как пример этого と訳されているが、原文にない этого が挿入されている。「その説明例として」ということであるが、「そのの」という代名詞属格単数はこの段落の直前の、この寓話の導入部にあたる箇所の内容を受けている。結果を必ずもたら

す原因となる行い（カルマ）をしているのであるから、この原因結果のメカニズムからは逃れることができないのだが、もし実体としての自我が存在するという誤った考えを克服するならば、その人と他の人が祝福されるもとなるかもしれない、と言っているのです、その例話として、という意味である。英語よりも露訳の方がより丁寧な文になっているわけである。

<p>⑪ Он был уже в аду много лет и не мог избавиться от своего бедственного положения, когда Будда явился на земле и достиг блаженного состояния просветления.</p>	<p>⑪ He had been in Hell several kalpas and was unable to rise out of his wretched condition, when Buddha appeared upon earth and attained to the blessed state of enlightenment.</p>
---	---

⑪ 英の過去完了形に相当する文法形式のない露では副詞 уже を挿入している。地獄にいた長い期間を表すのに英は梵語起源の kalpa (劫) を用いているが、露では馴染みがないのか普通の лето (年) に置き換えている。

その時に仏陀が地上に出現して、光明の至福の状態に到達した、という箇所は露英正確に対応している。しかし英単語 enlightenment は光りの意味は勿論あるのだが、悟りに対しても用いられるので、ここでは「光に満ちた／成覚の至福の状態」という二義を含んでいるようである。露単語 просветление にそうした二義があるかどうかは定かではない。

<p>⑫ В это достопамятное время луч света попал и в ад, возбудив во всех демонах жизнь и надежду, и разбойник Кандата громко закричал:</p>	<p>⑫ At that memorable moment a ray of light fell down into hell quickening all the demons with life and hope, and the robber Kandata cried aloud:</p>
---	--

⑫ 露では、仏陀の一條の光が地獄にも入り込んだ、と「も」(и) を付加することで、光が地上の各所のみならず、地獄にまでも及んだ、というコノテーションを与えている。

英の現在分詞 quickening は一旦は生きようとする気持ちや希望を失って萎えていた亡者達を再び希望でもって蘇らせたということである。これに対応する露の副動詞 возбудив はすべての亡者達に生命と希望を呼び起こさせた、とある。前置詞句と対格目的語の用い方が英露で逆転しているが、大筋では対応していると言えよう。

<p>⑬ "О Будда блаженный, сжался надо мной! ⑭ Я страшно страдаю; и хотя я делал зло, я желаю теперь идти по пути праведности. ⑮ Но я не могу выпутаться из сети горя; помоги мне, господи, сжался надо мной!"</p>	<p>⑬ 'O blessed Buddha, have mercy upon me! ⑭ I suffer greatly, and although I have done evil, I am anxious to walk in the noble path of righteousness. ⑮ But I cannot extricate myself from the net of sorrow. Help me, O Lord; have mercy on me!"</p>
--	---

⑭ この文の後半部に露は英にない「今」(теперь)を付加し、of righteousnessを落としている。

⑮ сеть = netという語の使用が、後ででてくる蜘蛛の巣を予想したものかどうかは不明である。

⑯ Закон кармы таков, что злые дела ведут к гибели.	⑯ Now, it is the law of Karma that evil deeds lead to destruction,
--	--

⑯ 英のNowが露では略されている。

	for absolute evil is so bad that it cannot exist. Absolute evil involves impossibility of existence. But good deeds lead to life. Thus there is a final end of every deed that is done, but there is no end in the development of good deeds. The least act of goodness bears fruits containing new seeds of goodness and they continue to grow, they nourish the soul in its weary transmigration until it reaches the final deliverance from all evil in Nirvâna.
--	---

英の⑯の後半からかなりの部分が露では脱落している。故意の省略か、不注意による脱落かは今のところ分からない。

⑰ Когда Будда услышал просьбу страдающего в аду демона, он послал к нему паука на паутине, и паук сказал:	⑰ "When Buddha, the Lord, heard the prayer of the demon suffering in hell, he sent down a spider on a cobweb and the spider said:
---	---

⑰ 英で「仏世尊」となっているところを露は単に「仏」と短縮した。亡者に掛かる形容語が英では現在分詞、露では能動形動詞現在と、きちんと対応している。露では英にない蜘蛛の派遣先をк немуと追記している。

⑱ "Схватись за мою паутину и вылезай по ней из ада". ⑲ Когда паук исчез из вида, Кандата схватился за паутину и стал вылезать по ней.	⑱ "Take hold of the web and climb up.' ⑲ When the spider had again disappeared out of sight, Kandata made great efforts to climb up and he succeeded.
---	---

⑱ 英の「蜘蛛の巣を掴め」を露は「私の蜘蛛の巣を掴め」と付加している。「登れ」に対しても「それを地獄から登れ」と長くしている。

⑱ 英の「登ろうと大いに努力した」を露は「蜘蛛の巣を掴んだ」としている。

英の「(糸を登るのを) 続けていった」に対し、露は「糸を(つたって地獄から) 這い出始めた」と少し引き延ばしている。

<p>⑳ Паутина была так крепка, что не обрывалась, и он поднимался по ней все выше и выше. ㉑ И друг он почувствовал, что нить стала дрожать и колебаться, потому что за ним начинали лезть по паутине и другие страдалцы.</p>	<p>㉑ The web was so strong that it held, and he ascended higher and higher. ㉑ "Suddenly he felt the thread trembling and shaking, for behind him some of his fellow-sufferers were beginning to climb up.</p>
---	---

㉑ 英のit held という肯定表現を、露はне обрывалась という否定表現で対応させている。また登っていったという動詞に関連する副詞句 по нейを付加している。比較級副詞には、単一式比較級短語尾で対応させている。

㉑ 糸が揺れるのを感じることを英はSVOC 構文で表すのに対し、露は接続詞を使った従属文で表している。揺れ、震えるという二つの動詞は不定詞にしてきちんと使い、さらに～し始めたという動詞を付加している。

<p>㉒ Кандата испугался; он видел тонкость паутины и видел, что она растягивается от увеличившейся тяжести. ㉓ Но паутина все еще держала его.</p>	<p>㉒ Kandata became frightened. He saw the thinness of the web, and observed that it was elastic, for under the increased weight it stretched out; ㉓ yet it still seemed strong enough to carry him.</p>
--	--

㉒ 露は英のit was elasticを落としている。またstretched outという過去形に対してрастягиваетсяという現在形が対応しているのは、露には従属節における時制の一致がないからである。

㉓ 露は英の「十分に強いようだ」という部分が落とされている。still = всё ещё。

<p>㉔ Кандата перед этим смотрел только вверх, теперь же он посмотрел вниз и увидел, что за ним лезла по паутине бесчисленная толпа жителей ада.</p>	<p>㉔ Kandata had heretofore only looked up; he now looked down, and saw following close upon his heels, also climbing up on the cobweb a numberless mob of the denizens of hell.</p>
---	--

㉔ カンダタは糸を登りながら、以前は上だけを(何度も)見上げていたが、今や下を見下ろした。英は最初の動作を過去完了を用いて表現しているが、そうした文法範疇を持たない露は替わりに、対になる不完了体(смотреть)と完了体(посмотреть)の動詞を用いて対照させている。その次の「見た」という動作の目的語は、英はSVCO (< SVOC) 構文で

表しているが、露は接続詞を用いて文にしている。地獄の住人達の無数の群れの動作は英では二つの分詞で示されているが、露ではfollowingの方は落として、climbing upだけをлезлаで訳している。しかしза нимは英での一番目の分詞にかかわるhis heelsを反映しているようである。

②⑤ "Как может эта тонкая лить вынести тяжесть всех этих людей", ②⑥ подумал он и, испугавшись, громко закричал:	②⑤ 'How can this thin thread bear the weight of all?' ②⑥ he thought to himself, and seized with fear he shouted loudly:
--	---

②⑤ 英のof allに対し、露はвсех этих людей(これら全部の人々の)と補っている。

②⑦ "Пустите паутину, она моя!" ②⑧ И вдруг паутину оборвалась, и Кандата упал назад в ад.	②⑦ 'Let go the cobweb. It is mine!' ②⑧ "At once the cobweb broke, and Kandata fell back into hell.
--	--

②⑧ At once = И вдруг, back = назад, into = вと露は細部まで英に逐一对応させて、非常に丁寧に訳している。

②⑨ Заблуждение личности еще жило в Кандате. ③⑩ Он не знал чудесной силы искреннего стремления вверх для того, чтобы вступить на путь праведности.	②⑨ "The illusion of self was still upon Kandata. ③⑩ He did not know the miraculous power of a sincere longing to rise upwards and enter the noble path of righteousness.
---	--

②⑨ 寓話が始まる直前に与えられたキーワード the illusion of self = заблуждение личностиが、寓話が終わった直後に再出している。このことからこの寓意は余りにも明かである。カンダタはついにこの誤った考えを克服できなかったのである。

③⑩ 英ではand enterと並列されている部分は、露ではдля того, чтобы вступить 目的を表す句となっているし、その方が分かり易い。of righteousnessに相当する部分は露にはないがぎこちなくなる。

③① Стремление это тонко, как паутина, но оно поднимет миллионы людей, и чем больше будет людей лезть по паутине, тем легче будет каждому из них.	③① It is thin like a cobweb, but it will carry millions of people, and the more there are that climb it, the easier will be the efforts of every one of them.
--	---

③① 英 It では分かり難い。露は名詞でСтремлениеときちんと表現している。(上昇を)誠実に願うことであるが、それは蜘蛛の巣の様に細くて危うく見える。しかし多くの人を支えられ、多ければ多いほど容易になる。the more ... the easier = чем больше ... тем легчеと比較級構文は正確に対応している。その容易になるものであるが、英語ではthe effortsと

明示されているが、露では何も書かれていないので、больше людейと解せざるを得ないがぎこちなくなる。

<p>③② Но как только в сердце человека возникнет мысль, что паутина эта моя, что благо праведности принадлежит мне одному и что пусть никто не разделяет его со мной, то нить обрывается, и ты падаешь назад в прежнее состояние отдельной личности; отдельность же личности есть проклятие, а единение есть благословение.</p>	<p>③② But as soon as in a man's heart the idea arises : 'This is mine; let the bliss of righteousness be mine alone and let no one else partake of it,' the thread breaks and you fall back into your old condition of selfhood, for selfhood is damnation and truth is bliss.</p>
--	--

③② idea = мысльの内容は、英語では引用符を付して直接話法の形で与えられるが、露では三つの接続詞чтоを用いて間接話法の形で示されている。露英共に三項目が列挙されているが、カンダタが仏の救済にあずかれなかった原因を示すもので、重要である。トルストイがここを外さなかったのは流石である。as soon as = как только ... то. ケイラスは締め近づいた部分なので、より一般化して説く意図からか、selfをselfhoodという抽象概念に置き換えている。トルストイもそれに呼応して、отдельной личности, отдельность же личностиという句で表している。個別主義というか、自己中心主義(じこちゅう)である。最後の部分で、善悪二つの概念とその属性が対比的に述べられて、教えのまとめとなっている。

selfhood = отдельность личности ←→ truth ≠ единение

damnation = проклятие ←→ bliss = благословение

ケイラスはじこちゅうの対立概念を真理としたが、トルストイはそれをそのまま訳さずに「連合、団結」を表すединениеに置き換えた。対立概念としてはその方がいいし、また寓話の状況にも合致する。この様にトルストイはこの作品を自己内でいったん消化してから表現し直しているので、逐語訳から外れてゆくことにも躊躇をしなかった。

<p>③③ Что такое ад? ③④ Ад есть не что иное, как себялюбие, а нирвана есть жизнь общая...</p>	<p>③③ What is Hell? ③④ It is nothing but egotism, and Nirvana is a life of righteousness."</p>
--	--

③④ 英 nothing butに露は正確に対応して не что иное, как (に他ならぬ) とある。

英 a life of righteousness (正義の生活) に対する露 жизнь общая (一般的生活) というのが面白い。<前置詞+名詞>が<形容詞>に転換されているが、地獄と涅槃が対極にあるものと理解されれば、エゴ主義すなわち個人主義に対置されるのは一般、全体ということであるから、内容をとって意識したものと思われる。これはличностьの対義語としても理解されているのであろう。Beiheft 112, p.15に引いた『戦争と平和』の一節が関連する。

<p>③⑤ - Дайте же мне ухватиться за паутину,- ③⑥ сказал умирающий атаман разбойников Магадута, когда монах кончил свой рассказ,- и я выберусь из пучины ада.</p>	<p>③⑤ "Let me take hold of a spiderweb," ③⑥ said the dying robber chief, when the shramana had finished his story, "and I shall pull myself up out of the depth of hell."</p>
---	---

③⑥ 英 dyingには露 умирающий 能動形動詞現在を充てて正確に対応させている。盗賊の首領も丁寧に訳した上に、固有名詞のマハードゥータも添えている。英の再帰代名詞使用に対しては、-ся 動詞を用いて対応させている。

【蛇足：ぶりんすの寓話】『方法叙説』をものした哲学者は、その功績が認められて、天界へと登る蜘蛛の糸が授けられました。登ってゆく途上で哲学者は習性となった思索を始め、蜘蛛の糸の存在を懐疑しました。そして cogito ergo sum とつぶやいた途端に、蜘蛛の糸は消え、地獄に真っ逆さま。

【付記】本稿には引用文献の必要な書誌情報を省略したが、それは原稿提出から初校の間に相前後して現れたものの文献表に記載されているからである。

網倉加奈 2011『異文化間における宗教観の変容——ポール・ケイラスにおける西洋と東洋、キリスト教と仏教——』平成23年度大妻女子大学比較文化学部提出学士請求論文；
rpt. プリンス通信・Beiheft 111(Series Dissertationum II) Tama:Omega Verlag.

網倉加奈+ぶりんす2012 『『異文化間における宗教観の変容』補足』（=プリンス通信・Beiheft 1 12) Tama: Omega Verlag.

『佛教研究』40 (2012) に掲載予定の拙稿「ポール・ケイラスのパーリ聖典理解—東洋と西洋の狭間で—」も関連するものである。

LIII. 梵文金光明経捨身品の偈頌

1. 鎮護国家を標榜した奈良時代の我が国では、その護国思想の故に縁の深かった『金光明経』はその後『法華経』その他にその地位を取って代わられるが、その重要性が消失したわけではない。

近代日本になり、インド学や仏教学に西欧式の新しい方法が導入され、これらの分野が再生される息吹の中で、この経の完全な近代的な刊本は日本で最初に編纂された(泉本1931年)^{*1}。この日本エディションが準備されつつあるときに、ドイツでも平行して作業

*1 1898年にカルカッタの Buddhist Text Society of India から刊本が出ているが、全体の四分の三程で中断している上に、良質でないネパール系の一写本のみに基づいたもので、最初の刊本はやはり1931年の泉本ということになる。なお本稿では刊本・和訳並びに諸伝本、二次的研究を列举する余裕はないので、代わりに次のレファレンスツールを挙げるにとどめる。山田龍城『梵語仏典の諸文献』(京都:平楽寺書店,

が進められており、その成果は日本より6年遅れて現れた(ノーベル本 1937年)。その後 Buddhist Sanskrit Texts シリーズの中の一冊として現れたが(バグチ本 1967年)、実質的には泉本の再刊と言ってよいものである。ノーベル本は本経の研究の上での底本的地位を占める程の 高い評価を受けているが、ノーベル自身が意味不明としている箇所が多々あり、最終的な エディションではない^{*1}。梵蔵漢の他にも中央アジアの諸言語訳もあり、同経の研究史を記述することは、大きな仕事になる。また重要な作業でもあるが、本稿ではそうしたことは一切他に委ね、諸伝本の各品対照表をひとつだけ挙げるにとどめる。

壬生台舜「梵・蔵・漢 品名対照表」『金光明経』(= 仏典講座13)(東京:大蔵出版,1987), 14頁と15頁の間に差し込まれた折り込み。

2. 小論の意図は、本経の捨身品(牝虎品)の解説が出発点になっている^{*2}。この品の物語は夙に玉虫厨子の一面に造形化され、以降日本の仏教文学にて言及されることが頻りであった。この捨身飼虎の物語は本経のみならず、他の多数の文献にも語られているので、本経の独壇場というわけではないが、上代に既にとりわけ珍重されていた経典のこの品を押さえておくことは、以後の捨身飼虎の流れを見る上での基礎ともなる。

しかしながら、捨身品全体の訳註を作成するというのには、まだそのための十分な環境が整っているとは言い難い。梵文が完全ではないことは前述の通りであるが、特に偈の部分は出発点にあるといっても過言ではない。以下は主として偈の読み直しに焦点をあてることとする。

3. 梵文の読み直しの際にチベット語訳を参照するのは定石であるが、金光明経のチベット語訳には三種ある。梵蔵漢を研究したノーベルは三種のチベット語訳を T1, T2, T3 とラベルを付けた。ノーベルの記述によると、T1は現存梵本に近く、多少増広した感じである。T2は更に増広した段階にあり、最も後代の発展形である義浄訳に近づいている、ということである。ただし T1 を踏襲している部分も多い。T3は義浄訳からの重訳である。

1959), 102-103. 簡単な解説は、壬生台舜「金光明経」『名著通信』13 (1977.10), 16-17; 荒木良道「金光明経の梵本について」『名著通信』22 (1978.7), 21.

*1 ノーベルはその後同経のチベット語訳の校訂本や語彙集、義浄訳のドイツ語訳並びに義浄訳からのチベット語の重訳の校訂本を作成する等、金光明経研究に多大な貢献をなした。

*2 捨身飼虎説話はエドウィン・アーノルドを介して、T.S.エリオットにも用いられている(『灰の水曜日』)。またジョージ・エリオット『ダニエル・デロンダ』にも想を与えている。西欧社会にどのようにしてこの物語が伝わっていったかを跡づけるために、多数の文献に語られる本話を順に見てゆくことが求められる。金光明経所収のものはひとつの基本形でもあり、これまで翻訳もいくつかあるものの、肝心の梵文テキストが必ずしも万全なものではないので、特に問題の多い偈の部分から再検討を始める次第である。賢愚経所収のものは、その蒙古語版を2003年の演習時に扱い、和訳を私家版で出したが、西藏語版を対面に配する増補版を予定しつつそのままに果たせずに到っている。

3.1. ここでチベット訳について言及するのが順序であり、当初の原稿の構成はそうになっていた。しかし分量が相当に増大したので、別途用意しつつあったチベット語訳からの和訳の序文にその段落を回すことにした。結論だけ述べておくと、金光明経は各品ごとのその成立の歴史を持っているので、一挙に全体的結論を求めずに、各品ごとの個別研究の結果を集積してゆくことが肝要であるということである。

4. 小論の主題は捨身品の、主として偈頌の読み直しにある。同品の諸本における所在は以下の通りである。

S: XVIII Vyāghrī-parivarta. Nobel 201-240. XIX. Idzumi 185-213. Bagchi 106-122.

C1: 17 捨身品。大正 16.353c21-356c21.

C2: 22 捨身品。大正 16.396c23-399c21.

C3: 26 捨身品。大正 16.450c18-454b25.

T1: 26 Lus yongs su btang ba. D rGyud Pha 53a6-60b6 Q rGyud Pha 54v2-61v4.

T2: 26 sTag mo la lus yongs su btang ba. D rGyud Pa 264r4-271r5. Q rGyud Pa 273r3-280v7.

T3: 18 sTag mo la lus yongs su btang ba. D Pa 137a5-145b3. Q rGyud Pa 142v2-15r8.

4.1. Sとしてはノーベル本を第一に用いる。というより本稿の主題はノーベル本の偈の読み直しである。泉本は随時参照する。バグチ本は泉本の再刊に過ぎないので、以下には言及しない。

4.2. C1 は金光明経の発展史の上で現存最古の段階を反映しているといわれるので、いわば漢文の基本形となる。

C2 は中国にて先行する漢訳諸訳をとりまとめたもので、中間段階を反映してはいるが、全体としてこのような構成をもったインド語版が存在したというわけではない。各品をあちこちから集めた取り合わせ本である。C1 にない品の場合は各品研究の上で重要な資料となる。捨身品の場合はC1 を踏襲しているので、本稿では言及しない。

C3 は最も増広されたもので、全体の構成も完備しており、また文章も整っている。SはC1 に近いなどと言われることもあったが、捨身品に関してはむしろC3 に対応するところが多くので、頻繁に参照した。

4.3. T2 はT1 より増広された後の段階を反映しているといわれるが、それは金光明経全体の構成から言われることで、同一の品がある場合には、T2 はT1 とほぼ同一の本文を示す。T1 には訳者その他の情報は付随していないので、外的証拠からT2 との先後関係を決めることはできないが、T1 がT2 の一部を抜き出したと考えるより、増補にあたりT2 は使用できる部分は T1 を踏襲したと考える方が自然である。捨身品の場合は両本はほぼ同一の本文を示すので、僅かな例外を除いて、専らT1 のみを頻繁に参照した。

T3 はC3 から訳されたものであるので、独立の価値は乏しい。ただ一番完備したC3 の基となったインド語原典は、三つ目のチベット語訳を作成する段階で既に失われていたようで、次善の策としてC3 を底本としたものと思われる。重訳ではあるが、最も完備した体裁

を持つ伝本をチベット大蔵經にいた編集者の見識は評価される。

4.4. 以上の諸伝本の関係は、各品ごとに相違がある様なので、一概に論ずるよりも、各品ごとに見定めてゆくことが必要であろう*1。そうした個別作業の積み重ねの上で、また全般的な結論を下すことが可能になる。この意味で本稿は捨身飼虎説話の把握のための偈の読み直しという基礎作業ではあるが、同時にこの個別作業の一環ともなることを願うものである。

5. 以上述べたことから、捨身品の偈の読み直しには、C1 S T1 C3 が用いられる。まずは捨身品を段落にわけて、諸本の位置を示す対照表を作成する。その際に、ある本の偈は別の本では散文になっていることもあるので、その事情をも示すことにする。偈の番号はノーベルのものを採用し、他本の偈は相当するものに同じ番号を与える（混乱を避けるために他本には通し番号を付けない）。

5.1.

- | | |
|-----------------|---------------|
| 1. 現在物語 | 25. 兄達を帰す |
| 1.1. 導入 | 26. 捨身 |
| 1.2. パーンチャーラを遊行 | 27. 兄達の逡巡 |
| 1.3. 座の設営 | 28. 王妃の悪夢 |
| 1.4. 塔の出現 | 29. 兄達の報告 |
| 1.5. 遺骨の開示 | 2.10. 捨身の地にて |
| 1.6. 遺骨の因縁 | 2.11. 塔の建立 |
| 2. 過去物語 | 3. 連結 |
| 2.1. 登場人物 | 2.10bis. 塔の建立 |
| 2.2. 森の遊観 | 4. 終結 |
| 2.3. 飢えた牝虎との出会い | 5. 尾題 |
| 2.4. 捨身の決意 | |

5.2. 捨身品では上の内容が二度にわたって語られる。一度目は散文韻文交じりで[第1部]、二度目は韻文のみである[第2部]。従って第1部の韻文と、第2部の韻文は意味が違うので、二度目の韻文は第2部内で番号をまた1から振り直した方がよい。しかしノーベルは連続して番号を振っているので、一切の混乱を避けるために、新たな番号付けは行わない。以上の関係を表解したコンコーダンスを作成したが、これもまた分量の関係から別稿に回すことにした。

6. 本節で捨身品の偈を扱うが、偈であると認定するためには、韻律が同定できていないてはならない。すべての偈にわたって同定できたわけではないが、ノーベル本の偈番号は

*1 この点で、鈴木隆泰氏の一連の論文は貴重な礎石となる。

踏襲し、原則として番号の直後に韻律を記した。またノーベル本では偈とされていないが、Cで偈の様に扱われているものがある。その場合番号にプライムを付して、番号がずれることは避けた。ノーベルは脚注に韻律名を書いていたりいなかったりする。書いてない場合は自明と考えたのかもしれないが、マートラーチャングダスが同定できていたとは思えない。

呈示している本文は、写本の読みの中に韻律に合致するものがあればそれを採択した(たとえ T と相応しなくとも)。ノーベルは T に合致させるため、また自己の設定した韻律スキームに合わせるために写本の読みを大胆に変更することに吝かではないが、写本の読みはできるだけ変更しない方針を採った。ノーベルが T に合わせて作成した本文に基づいて、蔵文は梵文によく一致する、といった発言がしばしばなされたが、それでは議論の順序が逆転している。

捨身品では T2 は T1 を踏襲している。従ってごく僅かの例外を除いて、T1 のみを参照する(デルゲ版のみを用いた)。

sigla: N = Nobel 刊本の読み。I = 泉刊本の読み。その他はそれぞれの刊本に用いられた写本の符号である。

verse 1: 韻律不明

prajñaptam āsanam bhagavan niṣīda jyeṣṭha

śreṣṭha nṛṇām varada variṣṭha mokṣavaha

paramāmr̥ takathām visṛja

nr̥ṇām hitāya bhagavan dhanaviprayukta

座がしつらえられました、世尊よ。お座り下さい。最上者よ。最勝者よ。人々の願いを叶える者よ。一番秀れし者よ。解脱をもたらす者よ。人々の為に、最高の甘露の説法を放出し賜え。世尊よ。[世俗的な]財産から離れた者よ。

5.1 節で分段した中で、§ 1 の過去物語は S と T1 の相応を除けば、すべてが乖離している。これはもともとあった金光明経の原型らしきものからそれぞれ発展していったというより、それぞれの伝本がそれぞれの段階で捨身品全体にジャーカカの形式を付与するために、過去物語を付加していったためであると思われる。そのため § 1 中にある偈は S と T1 の相応以外には、対応を求めることが困難である。したがって梵語写本から偈の部分を取り出すのは極めて難しく、韻律の同定、また仮に韻律を想定してもそのスキームに従った本文を確定することは殆ど不能である。この点は § 2 中の偈の場合とは大いに異なる点である。そもそもこの部分を偈と見なす根拠は T1 で偈となっている以外にはなく、泉本でも散文として印刷している。C1 にはこの部分はなく、C3 では「世尊よ、其の座を敷き終わりました。唯聖者は[説法の]時であるとお知り下さい」という阿難の短い発言が置かれて

いるばかりである。

梵文は二つの命令形の動詞を軸とする部分以外は、世尊に対する同格語が呼格で並んでいるだけで、それも仏の十号といった特性を示すものでもなく、偈らしきものを組み立てるために適当に配置したという印象が拭えない。bhagavanを二回使用するなどの稚拙な技巧も露呈している。それだけに写本の読みをなるべく採択して、T1からの還梵や、同定され得ない韻律に合わせる操作はなるべく避けるべきであろう。

a: ノーベルは12音節としているが、次行の一語を取り込んで14音節としてみた。もちろんそうしたからとして、適当な韻律が同定できるわけではないが。

b: N&I nṛṇām; BDE nṛṇām. 属格複数としては両方の形が可能である。いずれが採択されるかは、韻律が同定されなくてはならないが現時点では不能である。2行目も14音節から成るとすることだけはできそうである。この属格複数がいずれに掛かるのかというのも問題である。直前のśreṣṭhaに掛けるのも可能であるし、直後のvaradaに掛けるのも可能である。T1は「人々に願いを叶える者」ということで後者を支持する。N mokṣāvaha; ABCDEF °kṣa°; G mokṣāva; I mokṣavaha. ここの読みの採択も韻律の同定後に可能となるので、現時点では保留となる。

c: N paramāmṛtakathā viṣṛjyantu; ABCDE paramāmṛta(ta)kathām; F °thā. ABCDEF nur viṣṛja; G viṣṛhyantu; I paramāmṛtakathām viṣṛja. ノーベルは"Unsicher. Inhaltlich einfacher, aber textkritisch schwieriger ist °kathām viṣṛja." というが、その真の意図は不明である。ノーベルはこの定動詞をvi-sṛj-の(中期インド語形の)受動態命令法3人称複数として、主語のkathāを複数主格と見なしていることになる。しかしkathām単数対格viṣṛja 能動態命令法2人称単数とする方が簡便である。3行目は10音節にしかならず、どの写本の読みを採用しても、14音節にはならない。

d: ノーベルの3行目の最後の2単語を4行目に回すと、4行目は14音節となり、しかもvasantatilakaの一行を構成することになる。N bhavabandhanavipramukta; ABCDEF bhagavan(vam) nidhanaviprayuktaḥ (kt a); G bhavanvanavipramuktaḥ //; bhagavannidhanaviprayuktaḥ. ノーベルのbhavabandhanaはT1のsrid bcingsに基づいた還梵である。

ノーベルも"In Wirklichkeit handelt es sich doch wohl eher um feierliche Prosa."と述べている様に、偈として読むことは意味がないのかもしれない。唯一本箇所を偈とするT1を転記しておこう(T2の異読も)。

gdan bting lags na bcom ldan gtso bo mchog /

mi la mchog stsal dam pa srid bcings grol //

bzhugs te mi la sman slad mthar (T2 thar) bgyid kyi //

bka' mchid dam pa bdud rtsi gsung du gsol //

座がしつらえられました。世尊よ。最上者よ。最勝者よ。人々に願いを叶える者よ。一番秀れし者よ。存

在の束縛から解放された者よ。お坐りになって、人々のために、解脱をもたらす説法[すなわち]最高の甘露をお話し下さい。

verse 2: mālīnī

ayam ṛṣivara kālaḥ prāpta sat<t>vārthasāra

samadvayaniratasya draṣṭum asmābhir asthīny /

.....

aparimitaguṇasrītasya tat sādhu ghatta //

仙人のうちの最勝者よ、[以下の様な]時間が到達しました。人々の利益の精髓なるお方よ。平等と二分法を好む者の、計り知れない徳に接続している者の遺骨が私達によって見られる[時間が到達しました]。それを良く揺すって下さい。

ノーベルの言うところでは、写本で以下の偈は壊れていて、元来の韻律である mālīnī がわからなくなっている、ということである。確かにその通りである。C1C3には対応偈はもとより、散文部にも対応がない。T1 (従って T2 も) だけが偈になっている。蔵訳を基に、mālīnī の梵文をほぼ再構築したノーベルの手腕は見事という他はない。

a : N prāptaḥ; I ṛṣivarakālaprāpta (all Mss ptaḥ). ノーベルは "Metrisch °pta" と述べている様に、短音節が期待される場所である。語尾なしの主格単数形である。N sattvāgrasāra; ABCDEF satvārtha(am)sāra; G satvāgrasārasā; I sattvārthasāram (ACT rtham sārasama; K rthasarasama). T1 sems can mchog gi snying po la (T2 pa). mchog は agra に対応している様である。呼格であれば T2 の読みがよい。

bc : N śamadamaniratasya kṣāntiviryadhikasya / smṛtīmatiniratasya draṣṭum asmābhir asthīny; ABCDEF samadvayaniratasya; G sama°. ABCDEF om. kṣānti . . . niratasya. I madvayaniratasya draṣṭum / asmābhir asthīny (ACT samudgataḥ; K samudgata). ノーベルの構築は主として蔵訳に基づいているが、Gがどの程度までそれに一致しているのかは定かではない。T1 bzod dang brtsan 'grus che la zhi dang dul dga' zhing // blo gros dran dga'. 「大いなる忍耐と勇猛に於いて、寂靜と調御を喜び、思慮と記憶を好む(者の)」ノーベルの再構梵文では遺骨に掛かる属格の合成語が四つあるが、意味的にはともかく、形の上でも T1 がそれを反映しているかどうかは、確実ではない。

d : N °guṇāśrī° ; ABCDEF&I °guṇāśrī°. śrī の箇所にも長音節が期待されていることは、ノーベルの指摘の通りである。ā-śrī- でも śrī- でも意味は同一である。tat 以下は意味不明である。まずは tat が何を指しているか同定が困難である。遺骨であるとすれば、tāni と複数形にならねばならない。ghaṭṭa は ghaṭṭ- の命令法 2 人称単数だとすると「揺する、擦る」。I ghaṭaya は ghaṭ- の 10 類変化ととれば「接合せよ、集めよ」となるが、音節過剰である。

(verse 3 以下続く)